

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Nerval: LES ILLUMINÉSについて
Author(s)	加藤, 宗登
Citation	フランス文学 , 6・7 : 30 - 37
Issue Date	1965-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040864
Right	
Relation	



Nerval: LES ILLUMINÉS について

加 藤 宗 登

序

この作品集は1852年11月に出版された。構成は次の7篇である。

La Bibliothèque de Mon Oncle, Le Roi de Bicêtre (XVI^e Siècle), Histoire de l'Abbé de Bucquoy (XVII^e Siècle), Les Confidences de Nicolas (XVIII^e Siècle), Jacques Cazotte, Cagliostro (XVIII^e Siècle), Quintus Aucler.

これには更に《*ou LES PRÉCURSEURS DU SOCIALISME*》と副題がついている。

先ずこの titre と sous-titre のとり合せに注目させられる。そしてこの小論においては、さし当って《何故》という問題を取り扱い、《どんなふうに》の問題の一助としたいと考えている。

そこでこの小論は次のような段階をふむことになる。

1. この作品集が、表題と副題との意味を満足させるものではないことを Nerval 自身認めていながら、何故このような titre と sous-titre を付したのだろうか。
2. 常識的に考えて、この titre の持つ1種の contraste が作品群の中にも色々な形で看取されること。
3. illuminés として Nerval のとり上げた人物と Nerval との類似を見る。そこで Nerval が《*Les Illuminés*》において結論づけたいと思ったと考えられる言葉を最終の作品 (Quintus Aucler) の末節からひき出す。

4. この作品集は Nerval が常に手法として、又内的問題として持っていたと推察される *contraste*, 或は一種の *antithèse* に対する一つの結論づけであったと考える。

なお、本稿は鈴峯女子短大研究集報第11集に発表した《LES ILLUMINÉS ou LES PRÉCURSEURS DU SOCIALISME についての諸考察 [I]》に続くものである。

1

この作品集に盛られている anecdotes はその titre から持たれる先入観に一種の失望と困惑を与える。作者もこれは充分承知していることであった (Paulin Limayrac 宛の手紙)¹⁾。まず Jean Richer の解説を参照して見る。

Deux véritables illuminés seulement sont dépeints, Jacques Cazotte et Cagliostro, auxquels on peut joindre le néopaien Quintus Auclerc et l'étude sur Cagliostro est incomplète et superficielle. D'autre part, ce n'est que par un abus du langage qu'on peut mettre parmi les "illuminés" un fou comme Raoul Spifame, un aventurier pittoresque, l'abbé de Bucquoy, ou bien encore Rétif de la Bretonne qui ne s'intéressa à l'occultisme que par occasion. ²⁾

主要人物について、これは大方の見解である。そこで、副題の《社会思想の先駆者》

の当否を考えないとしても、真の幻視家であったと推察される人物は Quintus Aucler を入れて三人のみであり、その他は少くともこの表題に適さない人物である。そして皮肉なことに、この作品の中で、後者を扱った各篇は頁数においても前者をはるかに上まわる比重をもっている。同じく Jean Richer は、表題の矛盾はそれが《*excentriques*》と《*illuminés*》との奇妙な混乱から生じたものと言う³⁾。これは作品として一つの破綻を意味する。しかしながら、Nerval は既にこの作品の序文にあたる *La Bibliothèque de Mon Oncle* の中で《*Dans ce temps-ci, où les portraits littéraires ont quelque succès, j'ai voulu peindre certains excentriques de la philosophie.* ⁴⁾》そして又《*...présenter la vie et le caractère de mes excentriques.* ⁵⁾》と、この章に二度 *excentriques* という言葉で自己の描こうとする人物を表わしている。このことは、彼が扱おうとしている対象に対して十分な理解を持っていたことを示しているのみならず、一般的な批判を予測して予め慎重に自己の判断を提示しておこうとする周到な注意を示している。

以上述べて来たところは、先の Paulin Limayrac への手紙と合せて、Nerval がこの作品集を《ILLUMINÉS》と題すること、更に又 *OU LES PRÉCURSEURS DU SOCIALISME* なる副題をそえることに矛盾のあることを確認していながら、敢えてこの表題をとりあげたという解釈を可能にする。この点に関して、Henri Lemaître の解釈は明確である。先ず、Nerval はこの作品の副題に相当した別の作品を考えていたということを挙げる。これは既に《*Col-*

lection Lovenjoul》の草稿に確められている⁶⁾。そして、この二巻に当然入れられる筈の作品が *l'Almanach cabalistique pour 1850* に含まれ、特に Pierre Leroux に関する一章では、創造者、神を認めない神秘的人間観、神にかわる <l'âme universelle> 即ち monades の集合、を認めて社会的人間の loi を設定する Leroux の説が極めて簡略に述べてある。Lemaître はそこで、Fourier や Leroux の socialisme と illumimisme とは非常に接近したもので、Nerval は、あらゆる illuminés は précurseurs du socialisme であるという考えにいたったと説明する⁷⁾。無論これでは我々の疑問に満足を与える説明にはならないが、Nerval が illumimisme と socialisme との間に、それがたとえ偶然の思いつきであったにしろ、何か特別のつながりを感じていたことは納得される。Jean Richer は《*En fait, le titre et le sous-titre de l'ouvrage ont été adopté en hâte et comme par erreur: Les Illuminés ou les précurseurs du socialisme.*》⁸⁾ とこの問題を簡単に片づけている。何故うかつにも、急いでかかる表題を付さなければならなかったのか。これらの作品は1839年の *LE ROI DE BICÈTRE* に始まって、1850年までに少くとも下書は出来上っていたものであったということを想起しよう。Jean Richer はそれ以上この問題にふれていない。むしろ、Barbey d'Aurevilly の手きびしい批判に対して、《*nous croyons au contraire que le recueil de Nerval est sauvé par le style.*》⁹⁾ と却って作品を別の面から擁護している。Henri Lemaître の見解も、ただ副題の適当性のみを問題としているので、依然とし

て titre に対する疑問は残る。

2

さて、1852年当時の Nerval の生活はどのようなであったか。1841年、最初の精神錯乱の発作以来、彼がたえず恐れていたその再発は、1849年4月から殆んど彼の死の寸前（1854年10月19日）まで毎年彼を見舞っている。住居も1849年には Dr Ley の病院から Dr Aussandon の家に、それから rue Saint-Thomas-du-Louvre へと移り、1850年にはその住居を追い出され（11月20日）、1851年には rue Montyon から rue de Lille へ、1852年1月 rue de Martyrs-hôtel de Normandie, rue du Chantre, そして rue Neuve-des-Bons-Enfants, rue de Navarin の Gautier の家に、rue de Bréda の Stadler の appartement に、1月23日から2月にかけて、faubourg Saint-Denis の市立病院、それから rue du Mail へ、1853年も同じく2月6日から faubourg Saint-Denis の病院に入り、更に5回転居する¹⁰⁾。このように、1852年から1853年にかけては、特にめまぐるしい変りようである。経済状態はどうであったろうか。

Clément Borgal によると、演劇の分野に一大成功を夢みて、苦闘を続けている。

1850年の *Chariot d'enfant* について Borgal は次のように述べる¹¹⁾。

cette fois, l'occasion paraît favorable. L'adaptation, composée toujours avec le concours de Méry, voit le jour à l'Odéon, le 13 mai 1850.

Elle a d'abord un grand succès. Gérard au foyer, dans les couloirs, ne se sent plus de joie. Méry nous affirme qu'il

embrasse tout le monde, criant à tout venant que le drame aura deux cents représentations: «Toutes les loges seront louées avant midi.» Rassuré sur le paiement de ses dettes,...

La déception n'attendait pas même trois jours pour l'accabler. Passant le lendemain aux bureaux, il dut constater qu'il n'y avait aucune location.

1851年12月に書き上げた *l'Imagier de Harlem* も27日の上演から一ヶ月足らずして、《l'enthousiasme est tombé》、1月23日からは上演の度ごとに200フランの不足を示すにいたる¹²⁾。彼の友達は様々の援助を与えている。Arsène Houssaye (directeur de la Comédie-Française) は Kotzebue の *Misanthropie et Repentir* の翻訳を彼に依頼して急場を切り抜けさせる。1852年10月4日、Houssaye 宛の手紙に《Je vous prie de payer, au besoin, à M. Porcher la somme de cent cinquante francs que je lui dois, soit sur ce qui doit me revenir de la traduction de *Misanthropie et Repentir*, soit sur ma rédaction de l'Artiste.》¹³⁾と Nerval は苦しいやりくりの一端をのぞかせている。

以上見て来た如く、この作品の出版にいたる数年の Nerval の実生活は相当さし迫った状態にあった。狂気の発作を封じこめる確実ないかなる手段もなかった。49年頃より急に転々として定まらなくなった住居。これはその当時の彼の不安な精神をはっきり物語っている。その上重なる負債の重圧があった。然し彼にとって、まずこの経済を好転させることが凡ゆる面に燭光を見出せそうな当面の課題であったろう。かかる事情を考慮する時、彼が敢えて内容にそぐ

わぬ表題を持った一巻を発表したことの意味がうなづけて来るのではなかろうか。

Saint-Simon, Fourier の社会思想は当時 (1830年以降) 大流行し, 人間社会の égalité, propriété, solidarité を説く Pierre Leroux の思想 (George Sand に大きな影響を及ぼす), Proudhon の経済的自由主義, Auguste Comte の実証主義 (しかし, 1850年頃「人類教」というあやしげな神秘主義におちいる) 等, 時代の文学に深く影響を与え, 《ロマン主義に社会的神秘主義の一方向をとらせ, 博愛的で産業万能の夢は当時いたるところにひろがっていたのである。》¹⁴⁾この間にあって発表された Nerval の LES ILLUMINÉS ou LES PRÉCURSEURS DU SOCIALISME がいかに衆目を惹くに足る時宜に適った表題であったかは理解出来よう。そうして, 一時的にも新鮮な感覚をもつ作品で, 時代のハイライトを浴びることは彼の悲願である貧困からの脱出の一手段であったと推察される。

3

彼が全く意識的に, 計算の上でこの作品を構成したと考えられる事情の一つに, 狂人 Raoul Spifame を描いた LE ROI DE BICÈTRE の執筆者の問題がある。これが Nerval の手になるものでなく, 実際は彼の要請により, Auguste Maquet によって書かれたということはほぼ定説となっている。¹⁵⁾にも拘らず敢えてこの一篇を中に組み入れたということ, その是非は別として, これには彼の作品構成上の意図が強く働いていると推察される。ここで注意すべきことは, 第一にこの Raoul Spifame なる人物が真正の狂人であったということ

Nerval はよく知っていて作品集に加えたということ, 第二に, 狂気が現実生活へ溢れ出た例として解釈出来ること, 第三に非常に素朴な形で, Raoul Spifame は彼の sosie である Henri II の中に自分を見出したが, それは Nerval が double の問題に入って行く一つの原型と見られることである。

さて次に, 1853年7月31日, 日曜日 *La Presse* の文芸欄に Paulin Limayrac は Nerval の作品に関する論評記事を発表した。その中の一節に,

Les Illuminés que nous raconte l'auteur sont Raoul Spifame, le roi de Bicêtre, l'abbé de Bucquoy, Rétif de la Bretonne, Cazotte, Cagliostro, Quintus Aucler. Pourquoi ceux-là et non pas d'autres? Et pourquoi appeler ces illuminés, si illuminés il y a, les précurseurs du socialisme?...¹⁶⁾

と述べている。この中に Limayrac が問題としていることは二つある。先ず, いかなる理由でこれらの作品 (或は人物) が illuminés の中にえらばれたのかということ, 次に何故これらの作中人物から illuminés と précurseurs du socialisme とが結びつくのかという疑問である。

この評論からもうかがえるように, LES ILLUMINÉS 全体からみても, 結局表題, 副題ともに非常に冒険的な試みであって, 表題と副題とをもって, 一見無縁のもの, 対照的なものの組合せを試みているという印象をまぬがれない。むしろ彼は LES ILLUMINÉS の中にこれら二つのテーマの結合を示す一節を試みていないわけではない。その一つの例は, 中世の Templiers

の働きを論じている箇所¹⁷⁾ 他に Robespierre と Catherine Théot について記している箇所¹⁸⁾があげられる。しかしながらこれらの例はいずれも *Cagliostro* の中の一節にすぎず、表題に対して申訳の如く挿入されている感がある。しかしながら、同じ *Cagliostro* の中で、当世の殆んど歴史家達が、大革命の指導者達の多くが神秘家の associations に加わっていたという事実を詳細に研究することを怠ったと述べている所は¹⁹⁾、Nerval の表題に関する確信を示していると解釈出来る。しかし彼のこの確信は作品の中で殆んど問題にならない。何故なら彼はその点を究明することをせず、自から内容を裏切っているからである。作者は常に作品とその表題に対する責を負わざるを得ない。これに答える作品が用意されていたとしても、又そこにいかなる確信があったとしても、この不備な点について、作品の受ける批判を Nerval 自身予想しないものではなかったであろう。

4

作品の中に意識的な構えが見られれば見られるほど、表題は内容に対する symbole の役目をつとめる。Nerval のこの LES ILLUMINÉS に対する態度は正にこれに適當する。先に挙げた *Le Roi de Bicêtre* の Raoul Spifame なる人物は《Il semblait au roi Henri II qu'un portrait fût placé en face de lui, qui reproduisait toute sa personne, en transformant seulement en noirs ses vêtements splendides》²⁰⁾

この人物については既に第3章においてふれたが、言葉を換えれば、正気と狂気、現実と夢、それに double (分身) の thème

を想起させた。上例についても、陰気で風采の上がらぬ avocat (Spifame) と《la noblesse et l'agrément de sa figure》を持つ roi (Henri II), <noir> と <vêtements splendides> 等明確にその対照的な人物を描き分けている。こうして描く対象に contraste を目立たせる彼の手法は作品構成の上にも見られる。第1章に引用した Jean Richer の解説にもあった如く、この中で真の illuminés に数え得るものは Jacques Cazotte, *Cagliostro* それに Quintus Aucler の三人で、残りの Raoul Spifame は明らかに <fou> であり、l'abbé de Bucquoy は <aventurier pittoresque> である。R. M. Albérès は、Bucquoy の冒険は最も特徴のある genre *picaresque* に属するが、<magie> とは何ら共通するものがないと断言している。²¹⁾ Bucquoy は *Faux Saulniers* に混って、数奇な運命にもてあそばされ、何度も投獄されながら、遂に屈せず、脱走をくり返す非常に現実的な行動人である。最後に Restif de la Bretonne もこれとはやや異った意味での行動人である。小説家である彼は、次々と adventures を重ね、そこに彼の作品の題材を求め、そして実際の経験として得られたものだけが彼の作品となった。²²⁾

このように、Spifame, Bucquoy, Bretonne の3人は illuminés の中には到底数えることの出来ない人物達である。

更に、Cazotte, *Cagliostro*, Quintus Aucler の諸篇には主として18世紀における非常に多数の mystiques の引用とそれらの系譜、sciences occultes に関する Nerval の知識の羅列が目立ち、Cazotteの生活、épisodes を描写するあたりにわずかに緊密で活気の

ある描写が認められるだけである。これに反して Spifame, Bucquoy, Bretonne を描く Nerval の筆には、効果を計算した conteur の自信と余裕がうかがわれ、独立した作品としてのまとまりを備えている。

さて以上述べて来たように、LES ILLUMINÉS には色々の contraste が見出されるが、もしそれが作品的効果をねらった素材的興味に終始するものであったら、それは単に romantisme の教義を試みた技巧的な作品となっていたであろう。しかし、その点でも、全体のバランスと一貫性を欠くこの作品は成功していない。

5

しかしながら LES ILLUMINÉS に個性的な魅力を与えているものは、そのきわだった contraste が Nerval 自身の内部に密接につながっている点にある。

まず主流となるものは Restif de la Bretonne に代表される excentriques 群と Jacques Cazotte によって代表される illuminés 群である。そこには Nerval その人を語っている箇所が随所に見られるばかりでなく、この両者に与えた頁数も最大である。

Restif の中では、初恋の Jeannette Rousseau に始まり M^{me} Parangon, Zéfira それに女優 Mlle Guéant と続く一連の恋愛は、Nerval における Sylvie, Adrienne, Octavie, 女優 Jenny Colon に対するそれと驚くほどの一致を示していて、Nerval の Mythe の重要な要素である ressemblances の問題がここでも提示されている。さて、illuminés の中でも Cazotte に関する Nerval の sympathie は最も大き

い。しかもこの étude は今もって <作品と人物についてのかなり正確で完全な思想を与える>もので、Nerval が Cazotte その人に惹きつけられたのも <communauté d'aspirations mystiques> によると Jean Richer は言う。²³⁾ 次の例は確かにこの見解を一面において裏づける。Cazotte は自己の傑作 *Diable amoureux* を出版して間もなく <un mystérieux personnage> の訪問を受ける。彼の書物にある《ces évocations dans les ruines, ces mystères de la cabale, ce pouvoir occulte d'un homme sur les esprits de l'air,...》²⁴⁾ について、どこから学んだのかとその男に質問され、次のように答えた。

...J'ai lu beaucoup, mais sans doctrine, sans méthode particulière.²⁴⁾

この言葉は、Nerval について語る Marie-Jeanne Durry の批評を想起させる。

Sa vie, ses rêves, ses écrits sont traversés de leurs prestiges. Mais mille détails de doctrines ne font pas la doctrine, ils font des superstitions et de la poésie sans faire une religion.²⁵⁾

なお、*La Bibliothèque de Mon Oncle* の中の次の言葉、

Ces réflexions m'ont conduit à développer surtout le côté amusant et peut-être instructif que pouvait présenter la vie et le caractère de mes *excentriques*.²⁶⁾

は、この種の作品を書くにあたって Nerval の顧慮した興味と教訓の両面で、Cazotte の次のような叫びに殆んど完全な一致を示している。

...moi qui ne songeais qu'à divertir le public et à prouver seulement qu'il fallait

prendre garde au diable.²⁷⁾

以上の例では、Nerval 自身が illuminés にどれだけ影響を受けたかはわからない。この作品集には実際 Albérès の言葉を借りると <des épisodes étonnants> が <au rang d'anecdotes curieuses, sans jamais les interpréter dans un sens naturel>²⁸⁾ でしか語られていない。しかしながら、上記の両者に、そして更に広く言えば、彼等によって代表される antithèse に以て二つの方向、即ち行動と幻想とに sympathie によって密接につながっていることが窺える。これが LES ILLUMINÉS における Nerval の根本的な関心を支配した要素であったと思われる。しかし、LES ILLUMINÉS では、この contraste があまりに消化不良の形のままで、完全な対話にいたるを得なかった。確かに個々の作品が出来上ったのは1839年から1850年の長きにわたっているが、副題 OU LES PRÉCURSEURS DU SOCIALISME を含む確かな裏打ちとなる作品、つまり *Almanach cabalistique pour 1850*にあるものは殊更素材の新しさが目立つ ébauche にすぎず、それだけに、Nerval の表題にかけたあせりがなかったとは言いきれない。ただこのあせりとは、1850年以後の切迫した彼の貧困と病の重圧の下に、過去の支配する現在から脱出すること、言い換えると LES ILLUMINÉS OU LES PRÉCURSEURS DU SOCIALISME において、絶対者のいない、矛盾にみちた精神の集積に一つの結論を出すことであり、それは彼の内部の contraste に調和を与える試みにつながっていた。この作品集の最後に (*Quintus Aucler*)、それを物語る次のような一節がある。

Ceux qu'on appelait alors les théosophes n'étaient pas éloignés d'une semblable formule. ... professaient une philosophie analogue, dont les définitions et les pratiques ne variaient que par les noms.²⁹⁾

そして、最後に *Quintus Aucler* を通じて彼の語る結論は、先ず paganisme への訣別を示すと思われる。

Ainsi se termina la vie du dernier païen. Il abjura ces dieux qui, sans doute, ne lui avaient pas apporté au lit de mort les consolations attendues.³⁰⁾

この作品の副題の示す意義と、先に指摘した様々の contraste の要素とは異質のものではあるが、確信を持った意表をつく表題の設定そのものに、作品を通じて精神の秩序づけと統一を行おうとする Nerval の晩年の傾向が読みとれるのである。そうして作品自体に示された contraste も、*Aurélia* における自己と神、自己と分身 (double) の、即ち自己内部の contraste による mythe にいたるまでの凡ゆる作品に常にあらわれる Nerval の typique な方法ではなかったかと考える。この観点から、ILLUMINÉS の中で Nerval は人間対人間の contraste を示しながら、結果的に人間の限界を見究め、それに対する絶望を自己に結論づけたと思われるのである。これは又、表題の矛盾を敢えて冒した解答にもなるものではなからうか。(1964年11月)

- 1) G. de Nerval: Oeuvres Tome I (Pléiade), p. 1049 (lettre à Paulin Limayrac)
- 2) Jean Richer: Nerval, EXPÉRIENCE ET CRÉATION (Hachette) p. 392
- 3) *ibid.* p. 392
- 4) G. de Nerval: liv. cit. Tome II, p. 937
- 5) *ibid.* p. 938
- 6) *ibid.* p. 1474
- 7) G. de Nerval: Oeuvres, Tome premier (Classiques Garnier) p. 76
- 8) Jean Richer: liv. cit. p. 391
- 9) *ibid.* p. 393
- 10) Cf. G. de Nerval: liv. cit. Tome I (Pléiade) p. XXX
- 11) Clément Borgal: De quoi vivait Gérard de Nerval, p. 101 (Deux-Rives)
- 12) *ibid.* pp. 102-103
- 13) *ibid.* p. 103
G. de Nerval: liv. cit. (Pléiade) Tome I, p. 1032
- 14) V.-L. ソーニエ 「十九世紀フランス文学」クセジュ文庫 (白水社) pp. 81-82
- 15) Jean Senelier: Trois Apocryphes de Gérard de NERVAL (Revue d'Histoire Littéraire de la France 55^e année-N°2, Armand Colin) p. 210
- 16) G. de Nerval: liv. cit. (Pléiade) Tome I, p. 1441
- 17) G. de Nerval: liv. cit. (Pléiade) Tome II, p. 1173
- 18) *ibid.* p. 1183
- 19) *ibid.* p. 1183
- 20) *ibid.* p. 940
- 21) R. M. Albérès: Gérard de Nerval (Éditions Universitaires) p. 83
- 22) G. de Nerval: liv. cit. (Pléiade) Tome II, p. 1093
- 23) Jean Richer: liv. cit. p. 398
- 24) G. de Nerval liv. cit. (Pléiade) Tome II. p. 1136
- 25) Marie-Jeanne Durry: Gérard de Nerval et le Mythe (Flammarion) p. 61
- 26) G. de Nerval: liv. cit. p. 938
- 27) *ibid.* p. 1137
- 28) R. M. Albérès: liv. cit. p. 83
- 29) G. de Nerval: liv. cit. (Pléiade) Tome II, p. 1210
- 30) *ibid.* p. 1212